

労働の本質をとらえかえすべき時代

永戸 祐三（日本労働者協同組合連合会副理事長）

いま、二つの現実がある。世界の資本主義の破局の表れとして見えてきている兆候と、もうひとつはそれをも越えようとしている労働者や国民にとって好ましい新しい時代への予兆だ。

雇用不安、大量失業、不安定就労の拡大という現実と、それに関連して、人と地域に必要な仕事がかたがたなくなっている、ということがあつたが、反対に、こういう時代であるからこそ、まともな仕事ややりがいのある仕事をやりたいという熱望が広範に広がっている時代でもある。とりわけ、高齢者のなかに仕事への熱意が高まっている。元気な間は社会に参加して自分もそれなりの役割を果たしたいという高齢者が増えてきている。また、子どもに手がかからなくなった女性たちのなかで仕事おこしの要望がきわめて強くなっている。

つまり、国が雇用・失業問題に責任をもたず、企業も利益だけを追求して地域を捨て、雇用責任を放棄しているなかで、仕事おこしの要望が多くなつた人たちのなかで高まっているという局面なのだと思う。このギャップともいえる二つの現実に対する、人びとの認識の広がりや高まりが、新しい運動創出への力を生みだすだろうし、自ら仕事を創出するパネになっていくのではないか。

では、今日の危機をどう打開すべきか。本質的な問題から考えねばならない。それは、社会経済の仕組みや仕事の根本を、利益や利潤を優先する考え方から人間を最優先する人間主義に置き替へなくてはならないということだ。

それと、労働の本質、労働の位置ということが問ひ直されなくてはいけない。労働は人間・人格そのものであると思う。労働とは利益を上げる手段のひとつであるというような考え方とは決別しなくてはならない。労働とか仕事は自らと人間全

体、地域社会全体のためにあるのだということをはっきり位置づけなくてはいけないと思う。

人間とは、本来、自由な存在であり、一人ひとり尊厳ある人格を持つ。これが、雇用関係が深まるなかで破壊されてきた。労働とはその人間を真に豊かにするものとしてあつたのに、利潤、金の前にひれ伏すことを余儀なくされ、労働というものに歪んだ認識が作られてきた。

労働と人間、労働と仕事における人間同士の関係に、本当の自由と平等をとりもどすことこそ現代の最大の課題ではないのか。

そうすると、いま企業がリストラをこり押しし、国が責任を放棄しているときに、それに反対し、要求し、責任を追及するのだが、それだけでは、大きくこれを越えていくことはできない。反対したり、要求したりしていくことと同時に、農業、福祉、環境など、いま時代の要請になっていることについて、自分たちが仕事をおこしていくことが大切だろう。

ヘルパーにしても老人の給配食にしても十分にいてない、必要な仕事はいっぱいあるのだけれど、大企業はそれをやろうとしない。それは労働者や市民の手にまかされようとしている。だから、われわれはそれをしっかり受けとめ、行政とも協同の関係を作る。こうなつたとき、市民社会というのは新たな顔を作り出すのだろう、と思う。

みなさんの話を聞いていて、いまこそ血のかよつたネットワークが必要なのだ、と強く感じる。農村や町や工場に分断されていた人たちが交流し力を合わせ、人間らしい生活を再生すること、それを阻害している仕組みとたたかうことが必要だろう。生きたネットワーク作りをなんとしてもやりたいと思う。

（労協新聞より）